

心に刻みたい音の響き

『おかあさんの被爆ピアノ』五藤利弘監督インタビュー



『おかあさんの被爆ピアノ』新宿K's cinemaほか全国順次公開中

配給 新日本映画社 © 2020映画「被爆ピアノ」製作委員会
 公式HP hibakupiano.com
 出演 佐野史郎 武藤十夢 (AKB48) 森口瑠子 宮川一朗太 南壽あさ子 ほか
 監督・脚本 五藤利弘
 ストーリー 調律師・矢川光則 (佐野史郎) は、持ち主から託された数台の被爆ピアノを修理、調律して、それを自ら運転する4トントラックに載せて全国を回っている。被爆ピアノの1台を母・江口久美子 (森口瑠子) が寄贈していたことを知った娘・菜々子 (武藤十夢) は、被爆ピアノコンサートに行き、矢川と出会うが…。

1945年8月6日8時15分、広島に投下された1発の原子爆弾。壊滅的な状況の中で奇跡的に焼け残った被爆ピアノを修理し、全国を回りながら平和コンサートを続ける調律師・矢川光則氏をモデルにドラマを展開させた映画『おかあさんの被爆ピアノ』の五藤利弘監督に、作品に込めた想いなどについてお話をうかがいました。

—被爆ピアノという言葉を知ったのは、五藤監督がフジテレビの「NONFIX」というドキュメンタリー番組をやらせてもらっていた時に、知人が「広島で被爆ピアノというのがあって、それとテレビで取り上げられないか」と持ち込んだんです。ほくもそこで初めて被爆ピアノというのがあったんだって知ったんです。それが2009年くらい。それから10年以上温めてきました。

五藤監督 その番組を放送した時に、取材しているなかで調律師の方に映画化させていた方がいいって話をしていたんです。五藤監督 候補には早い段階からさせていたんで、すけど、その頃の脚本ではヒロインの両親の年齢が少し上の設定で。お父さん役に佐野

—佐野さんに至る経緯は。五藤監督 候補には早い段階からさせていたんで、すけど、その頃の脚本ではヒロインの両親の年齢が少し上の設定で。お父さん役に佐野

—作品で描かれてる被爆2世に3世のような親子関係は実際にあるのでしょうか。五藤監督 2世の方向人かにかがったところ、広島市内

—作品で描かれてる被爆2世に3世のような親子関係は実際にあるのでしょうか。五藤監督 2世の方向人かにかがったところ、広島市内

罪なき孤児たちへの戦後補償を考える機会に



米軍が撮ったコザ孤児院の様子 (1945年8月4日・沖縄県公文書館所蔵)

「2020年を『戦争孤児問題』研究元年に」―この強い決意文から始まるのは、先月、吉川弘文館より発売された『戦争孤児たちの戦後史1 総論編』(編著 浅井春夫・川満彰/2200円+税)。

戦後、長い闇のなかにあった

戦争孤児たちの戦後史を掘り起こす貴重な1冊です。編者の一人である川満さんは、この本を編むことで3つの問題提起を行なっています。

- ①戦争は国が起した最悪最大の人災。その人災に子どもが巻き込まれたことに対し、日本政府は責任を持つべき。
- ②戦争で親をなくし、生活する術を失った子どもに対し日本政府及び沖縄(米軍政府・琉球政府)は、大きな施策を取るわけでもなく、個人の慈善事業に任せ、見てみぬふりをしてきた。今からでも日本政府・沖縄県は戦争孤児実態調査を行なうべきである。



③社会に放り出された子どもの暮らしは大きく歪み、人権が奪われた。そのことに対し日本政府は謝罪するとともに、今からでも戦争孤児一人ひとりに賠償すべき。

戦争終結後も続く想像絶する悲惨さ

沖縄の民間人収容所は、1945年4月9日頃からスタート。そこにどん押し込まれ、8月末時点で収容人数は約33万人に。戦争はもう終結しているのに、人権がない、ある種戦争状態でした。食糧は全然足りず、探しに山をくだって隣の集落に行くことすると米兵に襲われる。日本の敗残兵もまた襲ってくる。そんななかでさらに孤児として

にあった苦難とはまた違う苦難ではあるだろうけど。今は今で75年たってもそういう苦難のなかにいるというのか。—そういう差別があったということもあまり知られていないですよ。

五藤監督 でも広島の中でも、私はそうじゃなかったという方もいるし、その気持ちも分かりますという方もいます。映画の中で、年配の被爆者の方に言わせてるんですけど、「100人いれば100通り」の被爆の記憶がある。被爆者それぞれやっぱり違うのになっていくのは、お話をうかがってるなかで僕が感じたことなんですけどね。

—作品のなかで一番観てほしいところは。五藤監督 被爆したおばあちゃんが出て、お母さんが2世で、娘が出て、親子3代つなぐのをこのドラマから皆さんがどう風を感じてくださるか。被爆ピアノの音色を記憶していただいて、被爆という言葉を通して思い出せる。そういう歴史のあるピアノがあったことを、心に刻んでいただけたらいいなって。

新聞などによると、8月6日何の日か分からない若者が増えるそうです。だからこの映画で被爆ピアノの音色を記憶することによって、関心を持っていただけたらいいなと思います。

音色を記憶することで

8月6日連想して



五藤利弘監督

て隠したりする方がやはり昔はいたようです。あとは時代ですよ。広島の中でも50年代60年代というのはそういうことで裁判とか問題になったりしたみたいです。

—だから母(森口瑠子)は娘(武藤十夢)に広島のことを語りたがらなかったのですね。五藤監督 コロナでやっぱり今も差別が出てきてるじゃないですか。そんなに変わってないんじゃないかなあ。被爆2世の話になると差別みたいな形で、それが怖かったりするから皆さん隠したりしてたところもあるんです。嫁に行けないとか、福島にもつながらんじやないかと思うんです。戦争、原爆の被害

—作品のなかで一番観てほしいところは。五藤監督 被爆したおばあちゃんが出て、お母さんが2世で、娘が出て、親子3代つなぐのをこのドラマから皆さんがどう風を感じてくださるか。被爆ピアノの音色を記憶していただいて、被爆という言葉を通して思い出せる。そういう歴史のあるピアノがあったことを、心に刻んでいただけたらいいなって。

新聞などによると、8月6日何の日か分からない若者が増えるそうです。だからこの映画で被爆ピアノの音色を記憶することによって、関心を持っていただけたらいいなと思います。



先月発売の総論編。西日本編(8月24日発売予定)、東日本・満州編へと続く

おかれている悲惨さは想像を絶するものだったそうです。「実はこの本に書かれている沖縄戦前後の戦争孤児の中に出てくる満州引き上げの川満恵清は、僕のオヤジなんです」と打ち明ける川満さん。恵清が命からがら妹のフミと沖繩に帰ってきた3年くらい後に、シベリアに抑留された父の恵可(川満さんの祖父)は帰島するが、生活する能力がなかったと言います。結局父と叔母が親戚に預けられて、孤児と同じような仕打ちを受けたということも、川満さんが戦争孤児の全体像を明らかにしたいという気持ちにつながっているとのこと。

最後に川満さんは、「戦争孤児の戦後史の生きざまを認知させることにより、戦争責任をどう捉えるのか全国の人たちと一緒に考える素材となれば」と話してくれました。